

# 保育専攻生における保育実習経験の効果に関する研究 －保育者効力感変化に影響を与える事前要因の検討－

前 田 有 秀\*

A Study on the Effect of Childcare Training in Students Majoring Childcare  
－ Consideration of Factors that can Affect the Changes in Nursery Teachers-efficacy －

Tomohide Maeda

本研究では、保育専攻生における保育実習経験の効果を実習前後の保育者効力感変化として捉え、保育実習経験に影響を与える事前要因の検討を行った。事前要因として想定したのは、保育者志望動機・保育実習目標・本来感である。調査協力者は4年制大学の保育士養成校3大学の保育実習を経験する保育専攻生183名であり、実習前後を通して2回質問紙調査を行った。その結果、保育実習経験によって4年制保育専攻生の保育者効力感が上昇すること、保育実習経験とは「保育専攻生が保育実習特有の不安やストレスを経験しながら子ども理解を深め、保育的行為やコミュニケーション能力を獲得していく過程」であること、志望動機が低い保育専攻生には保育士を行動モデルとした実習目標を意識させることによって保育実習経験の効果が高まる傾向にあることが示された。以上のことから、保育実習経験の効果を高めるための保育実習指導の方向性が示された。

キーワード：保育実習、保育者効力感、保育者志望動機、保育実習目標、本来感

## 1 問題と目的

将来保育士を目指す保育専攻生にとって、保育所で行う保育実習での保育経験は大変重要である。保育士養成校においては、保育専攻生にとって学びの多い保育実習経験ができるよう実習前後に保育実習指導がなされているが、保育専攻生にとって保育実習経験とはどのような効果があるのだろうか。

はじめに、保育実習の効果に関する研究を概観する。須見（1972）は、保育実習の効果に関する研究として、保育実習経験が学生の自己評価にどのような影響を与えるかを検討している。さらに須見（1973）は「保育実習経験による保母へのイメージの変化」の観点で保育実習に関する研究を行い、学生の収容施設保母に対するイメージとして、「なりたい」、「好きな」、「明るい」など7項目についての保母へのイメージが実習前よりも高まることを明らかにした。また、中島（1988）は、保育所実習の効果を上げるために保育実習前の学生に対し「三歳児保育実習」を行っており、その経験によって保育実習後の保育に関する学生の意識変化を明らか

---

2017年3月22日受理  
\*尚綱学院大学 准教授

にしている。それによると、保育実習の効果として、①保育者志向性の変化、②子どもに対するイメージの変化、③保育に対する認識の変化、④保母職に対するイメージの変化、⑤実習への期待・不安の変化がみられ、それらは保育現場を体験することで得られると報告している。以上の先行研究から、保育実習の効果とは、保育実習経験を通して保育専攻生の保育全般に関するイメージ、つまり内的要因に変化が生ずるものと考えられる。しかし、保育実習では、実際に保育的行為を行うことから、内的要因だけでなく保育的行為の獲得にも効果があると考えられるが、保育的行為の獲得に着目した保育実習の効果に関する先行研究は見当たらない。

次に、保育実習の効果を判断するものとして「保育者効力感」がある。「保育者効力感」とは、Bandura (1977) の自己効力感理論から出発し、Gibson & Dembo (1984) による教師効力感尺度を経て、Ashton (1985) が発表した「教師効力感」をベースに、保育者、あるいは保育専攻生に適用するために、三木・桜井 (1998) によって開発されたものである。三木・桜井は、保育者効力感を「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」と定義し、保育短大生を対象に保育者効力感尺度を作成し、幼稚園教育実習の効果について検討した。その結果、保育短大生の保育者効力感が上昇したことを報告している。また、三木・桜井は保育者効力感尺度の妥当性を検討し、特性的自己効力感 (坂野・東條 (1982) の一般性セルフ・エフィカシー尺度による) と内的統制感 (鎌倉・樋口・清水 (1982) の Locus of Control 尺度による) との関連を調べた結果、保育者効力感は保育という限定された場面での自己効力感であること、さらに、幼稚園実習自己評価、幼稚園実習成績との相関を調べた結果、保育者効力感はある尺度であると報告している。それ以降の保育者効力感研究として、水野 (2001) は、幼児教育専攻学生の保育者効力感の発達過程を検討し、保育実習は子ども一人ひとりを理解し指導する自信を高めるのに寄与していると述べている。石川 (2003) は、入学後の学生の保育者効力感が徐々に減少していくこと、中村 (2006) は、実習経験のない1年生が実習経験のある2年生よりも高かったことを示しており、「夢見る保育者効力感」と名付けている。また、保育者効力感をさらに発展させた研究として、西山 (2006) は、三木・桜井の保育者効力感に「人間関係」の領域を加えた「多次元保育者効力感尺度」を開発し、小藺江 (2009) は、保育実習生の自己効力感尺度を作成するなど、保育者効力感に関する研究は1998年以降盛んになってきている。しかし、保育者効力感の研究の多くは短大などの2年制の保育専攻生を対象としており、4年制の保育専攻生を対象とした研究は少ないのが現状である。4年制は2年制に比べ養成期間が長いことから、4年制保育専攻生の保育者効力感を検討することが求められる。

では、保育実習に影響を与える要因は何か。本研究では実習指導の観点から、保育実習前の事前要因に着目する。上長 (2010) は、長谷部 (2006) による保育者志望動機尺度 (17項目)、並びに内田・古谷・兼松・中村 (1993) による子どもに対するイメージ (40項目) を使用し、消極的志望動機が高い保育専攻生は、子どもに対して肯定的なイメージが高まり、かつ否定的なイメージが低下し、積極的志望動機群と同程度になることを報告している。また、森 (2003) は保育実習における学生の自己評価を検討し、自己評価高群と低群には保育実習目標の設定に違いがあることを報告しており、自己評価が高い学生は「子どもとの関わり」に目標の重点をおいているのに対し、自己評価が低い学生は「指導者との関わり」に目標の重点をおいていることを指摘している。よって、実習前の保育実習目標の設定が、保育実習の効果に影響を与えることが推察される。一方、吉田・田島 (2010) は実習に対する保育専攻生の不安を別の視点

から捉え、「本来感」が保育実習を通して、自分の中で立てた目標に向かっている実感が保育職への志向感や適性感を高めると指摘している。本来感とは「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」であると伊藤・小玉（2005）は定義しており、吉田らは保育実習では実習不安やストレスが影響を与えるが、本来感の持つ適応的な性質が保育実習特有の不安を軽減させ、新しい経験に対しても開かれた感覚を持つことを仮定し、その結果学生のコミュニケーション能力の成長が、本来感を媒介として保育職への適性感や志向感を高めることを指摘している。以上の先行研究から、保育実習経験に影響を与える事前要因として、「保育者志望動機」、「保育実習目標」、「本来感」の3要因が考えられる。

以上のことから、本研究では、保育実習経験の効果を「保育専攻生の保育に関するイメージの変化、及び保育的行為の獲得がなされるもの」と仮定し、その効果に影響を与える事前要因の検討を行う。保育実習経験の効果を示すものとして、三木・桜井の保育者効力感を実習前後に測定する。また、保育実習経験の効果に影響を与える事前要因として、「保育者志望動機」、「保育実習目標」、「本来感」の3要因を想定し、各要因が保育実習経験の効果、つまり保育者効力感の変化にどのように影響するのかを検討する。

本研究の仮説は、以下の通りである。

〔仮説1〕保育実習経験の効果として、保育短大生（2年制）と同様に、4年制保育専攻生においても実習前よりも実習後の保育者効力感が上昇するであろう。

〔仮説2〕保育者志望動機要因から、保育者志望動機が低い保育専攻生は、子どもに対して肯定的なイメージが高まり、かつ否定的なイメージが低下することから、実習後の保育者効力感が高くなるであろう。

〔仮説3〕保育実習目標要因から、保育実習に臨む際に、子どもとの関わりを重視した目標を持つ保育専攻生の方が、子どもと積極的に関わろうとするので、保育士を目標とした保育専攻生よりも実習後の保育者効力感が高くなるであろう。

〔仮説4〕本来感要因から、本来感が高い保育専攻生は、本来感の低い保育専攻生よりも実習中に感じる実習不安やストレスを軽減することが期待できるので、本来感が低い保育専攻生よりも実習後の保育者効力感が高くなるであろう。

以上を踏まえ、本研究では、保育実習経験に影響を与える事前要因を検証し、保育実習経験の効果を向上させるための保育実習指導の方向性を検討することを目的とする。

## 2 方法

対象は、Z県の4年制保育士養成校A大学・B大学・C大学において保育所実習Ⅱを経験する保育専攻生である。また、保育実習前後の個人内変化を測定するため、同じ対象に実習前と実習後の2回質問紙調査を行った。よって、有効回答者は、実習前質問紙調査（1回目）と実習後質問紙調査（2回目）を通して回答した保育専攻生である（C大学のみ保育所実習Ⅰ・Ⅱが連続している日程のため、保育所実習Ⅰの前に1回目の調査を行っている）。調査期間は、各大学の保育所実習Ⅱの時期に合わせて2012年6月1日から同年10月15日の間で行った。いずれの養成校においても、保育所実習Ⅱ前後およそ1カ月以内に全ての質問紙調査を行った。倫理的配慮として、調査協力者には不利益が生じないこと、研究発表時には個人が特定されない旨を文書、並びに口頭で説明しており、同意を得た者からのみ回答を得ている。なお、

男子学生については調査協力者が少なかったため除外した。最終的な有効回答者は183名である。

## 2-1 調査内容（1回目）

本研究では、同じ学生を対象に実習前と実習後2回質問紙調査を行った。ここでは実習前（1回目）の質問紙の調査項目を示す（表1-1参照）。

### 2-1-1 フェイスシート

フェイスシートには、大学名、学籍番号、性別、回答時点での保育職を希望するかどうかの記入を求めた。学籍番号を求めたのは、本研究が各尺度について保育実習前後の個人内変化を測定することを目的としているからである。将来の仕事の希望については、「(A) 保育園」「(B) 幼稚園」「(C) 保育以外」「(D) 決まっていない、あるいは迷っている」の中から1つ選ぶよう求めた。

### 2-1-2 保育者志望動機尺度

上長（2010）は、長谷部（2006）による保育者志望動機から積極的志望動機と消極的志望動機の2因子を抽出した。本研究ではそれを支持し、回答者の負担を軽減するため、上長の研究結果の各因子の上位の項目を第4まで抜粋し使用した（表1-2参照）。それぞれ「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法で回答を求めた。なお、※が付く項目は逆転項目である。

### 2-1-3 保育実習目標尺度

森（2010）は実習目標の設定（「子ども」または「指導者」）と実習自己評価との関連を見出ししている。本研究では、実習目標を「子ども目標群」と「保育士目標群」に群分けし、実習目標の設定の違いが実習にどのような効果をもたらすかを検討するために、森（2010）の「保育者養成実習における教授-学習過程の特徴」、小藺江（2009）による「保育実習自己効力感尺度作成の試み」、小笠原ら（2010）による「保育所実習を通じた学生の省察点」を参考に、保育実習の実態を踏まえた8項目の保育実習目標を抽出した。項目内容は表1-3の通りである。回答は(a)~(h)から保育専攻生が優先する項目を順に4項目まで選択するよう求めた。

表1-1 保育実習前（1回目）質問紙構成

1.	フェイスシート
2.	保育者志望動機尺度 [8項目]
3.	保育実習目標尺度 [8項目]
4.	保育者効力感尺度 [10項目]
5.	本来感尺度 [7項目]

表1-2 保育者志望動機尺度の項目

1.	子どもに関わる仕事をしたいから
2.	資格を取得できるから*
3.	幼稚園教諭、保育士にあこがれて
4.	子どもが好きだから
5.	周囲の人がすすめるから*
6.	やりがいのある仕事だから
7.	他に適当な職業がなかったから**
8.	ただ、何となく**

表1-3 保育実習目標尺度の項目

(a)	子どもと積極的に関わる
(b)	保育技術の習得（手遊び・ピアノ・読み聞かせ・製作など）
(c)	先生の子どもへの関わり方を観察・学習する
(d)	乳幼児の発達と特徴の理解
(e)	部分・全日実習の計画と実践
(f)	わからないことは先生にアドバイスをもらう
(g)	職員間の役割分担とチームワークについての理解
(h)	実習日誌の書き方

### 2-1-4 保育者効力感尺度

三木・桜井の保育者効力感尺度は「私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う」などの10項目で構成されており、保育者だけでなく保育専攻生にも適用可能である（表1-4参照）。本研究では、保育実習経験が保育者効力感の変化にどのように影響するかを測るために、実習前と実習後に測定を行う。原本と同じく「非常にそう思う」～「ほとんどそう思わない」の5件法で回答を求めた。

1.	私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う
2.	私は、子どもの能力に応じて課題を出すことができると思う
3.	保育プログラムが急に変更された場合でも、私はそれにうまく対処できると思う
4.	私は、どの年齢の担任になっても、うまくやっていけると思う
5.	私のクラスにいじめがあったとしても、うまく対処できると思う
6.	私は、保護者の信頼を得ることができると思う
7.	私は、子どもの状態が不安定な時にも、適切な対応ができると思う
8.	私は、クラス全体に目をむけ、集団への配慮も十分できると思う
9.	私は、一人一人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う
10.	私は、子どもの活動を考慮し、適切な保育環境（人的、物的）に整えることに十分努力できると思う

### 2-1-5 本来感尺度

吉田・田島（2010）は本来感が保育実習を通して自分の中で立てた目標に向かっていく実感が保育職への志向感や適性感を高めると述べている。保育実習では実習不安やストレスが実習生に影響を与えるが、本来感の持つ適応的な性質が保育実習特有の負担を軽減させ、新しい経験に対しても開かれた感覚を持つことができるので、本来感が高い保育専攻生は、良い実習を行う、つまり保育者効力感の上昇に繋がる要因になるのではないかと考えられる。本来感尺度は、原本と同じ7項目（表1-5参照）を、原本と同じく「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法（5点～1点）で回答を求めた。なお、※が付く項目は逆転項目である。

1.	いつも自分らしくいられる
2.	いつでも揺るがない「自分」をもっている
3.	人前でもありのままの自分が出せる
4.	他人と自分を比べて落ち込むことが多い※
5.	自分のやりたいことをやることができる
6.	これが自分だ、と実感できるものがある
7.	いつも自分を見失わないでいられる

### 2-2 調査内容（2回目）

次に、実習後（2回目）の質問紙調査の調査項目について表1-6に示す。なお、本研究においては、2回目の調査内容から保育者効力感尺度のみを使用した。保育者効力感尺度については、実習前（1回目）質問紙のものと同様である（表1-4参照）。

1.	フェイスシート
2.	保育実習自己評価尺度 [17項目]
3.	実習指導教授感尺度 [12項目]
4.	保育者効力感尺度 [10項目]
5.	実習自己採点 [100点満点]

### 3 結果

#### 3-1 実習前後の保育者効力感の変化

実習前保育者効力感（以下、前効力感と記す）と実習後保育者効力感（以下、後効力感と記す）について  $t$  検定を行った。前効力感の平均値は 28.78 (SD = 4.85)、後効力感の平均値は 29.60 (SD = 4.86) であった (表 2-1 参照)。その結果、自由度 182 で  $t$  値は 2.44、5%水準で有意であった ( $t(182) = 2.44, p < .05$ )。よって、保育実習を経験することで、4年制保育専攻生の保育者効力感（以下、効力感と記す）が上昇することが示された。よって、仮説 1 は支持された。なお、本研究において保育者効力感変化（以下、効力感変化と記す）とは実習の効果を示すものであり、後効力感得点から前効力感得点を引いた得点である。

	平均値	N	標準偏差 (SD)	t 値	自由度	有意確率 (両側)
前効力感	28.78 *	183	4.85	- 2.44	182	.016
後効力感	29.60 *	183	4.86			

#### 3-2 保育者効力感と事前要因との関係

本研究では、保育実習の効果を示すものとして、効力感変化得点を従属変数とし、以下に効力感に影響を与えると思定される 3つの事前要因を独立変数とした。3つの事前要因とは、保育者志望動機尺度（以下、志望動機と記す）、保育実習目標尺度、本来感尺度である。各要因は、得点化してから高群、低群などの 2群に分け、それぞれ前効力感得点、後効力感得点、効力感変化得点を算出した。以下に、各要因の群分けの方法、基礎集計、分散分析の結果を示す。

志望動機		前効力感 合計	後効力感 合計	効力感 変化得点
志望 動機 低群	平均値	27.10 **	28.52 **	1.42
	度数	82	82	82
	標準偏差	4.66	5.21	4.85
志望 動機 高群	平均値	30.14 **	30.48 **	.34
	度数	101	101	101
	標準偏差	4.60	4.39	4.30
合計	平均値	28.78 *	29.60 *	.82
	度数	183	183	183
	標準偏差	4.85	4.86	4.57

##### 3-2-1 保育者効力感に対する保育者志望動機の影響

志望動機尺度の平均値は 31.38 (SD = .28) であることから、30 点以下を志望動機低群 ( $n = 82$ )、31 点以上を志望動機 ( $n = 101$ ) とした。志望動機 (低群/高群) における各効力感得点の基礎集計を表 2-2 に示す。志望動機における高群と低群の群間の差を分散分析した結果、前効力感 (低群 27.10 / 高群 30.14) が 1%水準の有意 ( $F(1,181) = 19.58, p < .01$ )、後効力感 (低群 28.52 / 高群 30.48) が 1%水準の有意 ( $F(1,181) = 7.55, p < .01$ ) であり、どちらも高群が低群よりも有意に高かった。効力感変化 (低群 1.42 / 高群 .34) は  $F = .11$  で有意ではなかった。

以上のことから、実習前後を通して、志望動機が高い保育専攻生は効力感が高く、志望動機

が低い保育専攻生は効力感が低いという傾向がみられた。よって、仮説2は支持されず反対の結果が示された。また、効力感変化に対する志望動機の影響が有意ではなかったことから、保育実習の効果に対する志望動機の影響はみられないことが明らかとなった。

### 3-2-2 保育者効力感に対する保育実習目標の影響

保育実習目標については、回答者が(a)~(h)の全8項目から保育専攻生が優先する保育実習目標を順に第1から第4まで選択したものを1番(4点)~4番(1点)で得点化した。その合計得点を主成分分析した結果、以下の4つの成分が抽出された。成分1は、目標(c)「先生の子どもへの関わり方を学習する」・目標(d)「乳幼児の発達と特徴の理解」であった。成分2は、目標(e)「部分・全日実習の計画と実践」・目標(g)「職員間の役割分担とチームワークの理解」・目標(h)「実習日誌の書き方」であった。成分3は、目標(a)「子どもと積極的に関わる」であった。成分4は、目標(f)「わからないことは先生にアドバイスをもらう」であった。抽出された項目をみると、成分1と成分3は子ども目標を、成分2と成分4は保育士目標を表していると考えられるので、目標(a)(c)(d)を子ども目標群、目標(e)(f)(g)(h)を保育士目標群とした。なお、目標(b)「保育技術の習得」は主成分分析で抽出されなかったため、項目から除外した。子ども目標群と保育士目標群に群分けするため、保育士目標項目を逆転項目として計算したところ、保育実習目標尺度の平均値は4.26 (SD = .25)であったため、3点以下を保育士目標群 (n = 62)、4点以上を子ども目標群 (n = 121)とした。保育実習目標(保育士目標群/子ども目標群)における各効力感得点の基礎集計を表2-3に示す。

保育実習目標における子ども目標群と保育士目標群の群間の差を分散分析した結果、前効力感(保育士目標群 28.48/子ども目標群 28.93)が $F = .54$ 、後効力感(保育士目標群 30.02/子ども目標群 29.39)が $F = .41$ 、効力感変化(保育士目標群 1.55/子ども目標群 .45)が $F = .13$ であり、いずれも有意ではなかった。

以上のことから、実習前後の効力感、並びに効力感変化に対し、いずれも有意差がみられなかったことから、保育実習目標の違いによる影響はみられないことが示され、仮説3は支持されなかった。

保育実習目標		前効力感 合計	後効力感 合計	効力感 変化得点
保育士 目標群	平均値	28.48	30.02	1.54
	度数	62	62	62
	標準偏差	4.99	4.54	2-
子ども 目標群	平均値	28.93	29.39	.46
	度数	121	121	121
	標準偏差	4.80	5.03	4.56
合計	平均値	28.78*	29.60*	.82
	度数	183	183	183
	標準偏差	4.85	4.86	4.57

### 3-2-3 保育者効力感に対する本来感の影響

本来感尺度の信頼性をクロンバックの $\alpha$ 係数を用いて検討した結果.82(7項目)と高く、満足すべき信頼性が示された。本来感尺度の平均値は23.03 (SD = .35)であり、22点以下を低群 (n = 90)、23点以上を高群 (n = 93)とした。以下に、本来感(低群/高群)における各効力感得点の基礎集計を表2-4に示す。本来感における高群と低群の群間の差を分散分析した結果、前効力感(低群 27.07/高群 30.43)が1%水準の有意 ( $F(1,181) = 24.84, p < .01$ )、

後効力感（低群 27.62 / 高群 31.52）が 1%水準の有意（ $F(1,181) = 34.77, p < .01$ ）であり、いずれも高群が低群よりも有意に高かった。効力感変化（低群 .55 / 高群 1.09）は  $F = .43$  であり、有意ではなかった。

以上のことから、実習前後を通して、本来感が高い保育専攻生は保育者効力感が高く、本来感が低い保育専攻生は保育者効力感が低い傾向がみられた。よって、仮説4は支持された。しかし、効力感変化に対しては本来感の影響がみられなかった。

**表 2 - 4 本来感×保育者効力感**

本来感		前効力感 合計	後効力感 合計	効力感 変化得点
本来感 低群	平均値	27.07 **	27.62 **	.55
	度数	90	90	90
	標準偏差	4.18	4.07	4.77
本来感 高群	平均値	30.43 **	31.52 **	1.09
	度数	93	93	93
	標準偏差	4.91	4.82	4.39
合計	平均値	28.78 *	29.60 *	.82
	度数	183	183	183
	標準偏差	4.85	4.86	4.57

### 3-3 保育者効力感変化に対する2要因の検討

結果2では、いずれの要因も単独では効力感変化には影響がみられず、仮説5は支持されなかった。では、2要因においては効力感変化に影響がみられるのであろうか。ここでは3つの事前要因から2要因ずつの組み合わせを行い、効力感を加えた3要因（2群間）における基礎集計、分散分析を行い、効力感変化に影響を与える2要因を検討する。2要因の組み合わせは、「志望動機×保育実習目標」、「志望動機×本来感」、「保育実習目標×本来感」の3通りである。以下に、それぞれの分析結果を示す。

#### 3-3-1 保育者効力感変化に対する保育者志望動機と保育実習目標の影響

志望動機（低群／高群）と保育実習目標（保育士目標群／子ども目標群）における実習前後の効力感得点、効力感変化得点の基礎集計を表3-1に示す。志望動機（低群／高群）と保育実習目標（保育士目標群／子ども目標群）が効力感変化に及ぼす影響について分散分析で検討した結果、交互作用は10%水準で有意な傾向がみられた（ $F(1,179) = 3.72, P < 0.1$ ）。つまり、効力感変化に対し、子ども目標群は志望動機の違いに差はみられないが、保育士目標群は志望動機低群（3.06）が志望動機高群（.21）よりも高い傾向がみられた（図1参照）。

**表 3 - 1 志望動機×保育実習目標×保育者効力感**

志望動機	保育実習目標	前効力感 合計	後効力感 合計	効力感 変化得点	
志望動機 低群	保育士 目標群	平均値	25.76	28.82	3.06 †
		度数	29	29	29
		標準偏差	4.60	5.16	4.96
	子ども 目標群	平均値	27.83	28.36	.53
		度数	53	53	53
		標準偏差	4.56	5.29	4.60
志望動機 高群	保育士 目標群	平均値	30.85	31.06	.21
		度数	33	33	33
		標準偏差	4.06	3.68	3.76
	子ども 目標群	平均値	29.79	30.19	.40
		度数	68	68	68
		標準偏差	4.83	4.70	4.56



以上のことから、志望動機が低く、かつ保育士目標を持つ保育専攻生が保育実習を経験すると、保育者効力感が有意に上昇する傾向がみられることが示された。よって、志望動機と保育実習目標の2要因は効力感変化に影響することが示された。

### 3-3-2 保育者効力感に対する保育者志望動機と本来感の影響

志望動機尺度（低群／高群）と本来感尺度（低群／高群）における実習前後の効力感得点、効力感変化得点を表3-2に記す。志望動機（低群／高群）と本来感（低群／高群）が効力感変化に及ぼす影響について分散分析で検討した結果、交互作用は $F = .19$ で有意ではなかった。よって、志望動機と本来感の2要因は効力感変化に影響しないことが示された。

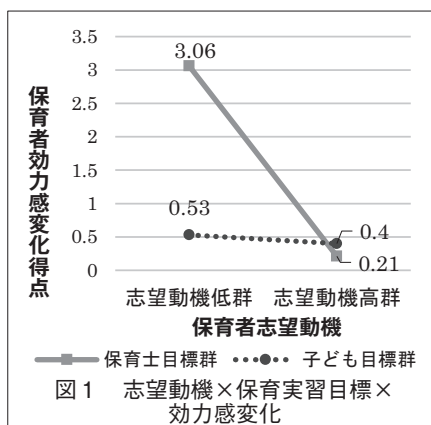


表3-2 志望動機×本来感×保育者効力感

志望動機	本来感		前効力感合計	後効力感合計	効力感変化得点
	低群	高群			
志望動機低群	本来感低群	平均值	26.13	26.83	.70
		度数	48	48	48
		標準偏差	4.15	4.85	5.04
	本来感高群	平均值	28.47	30.91	2.44
		度数	34	34	34
		標準偏差	5.04	4.81	4.45
志望動機高群	本来感低群	平均值	28.14	28.52	.38
		度数	42	42	42
		標準偏差	3.99	2.71	4.49
	本来感高群	平均值	31.56	31.86	.31
		度数	59	59	59
		標準偏差	4.50	4.83	4.19

表3-3 保育実習目標×本来感×保育者効力感

保育目標	本来感		前効力感合計	後効力感合計	効力感変化得点
	低群	高群			
保育士目標群	本来感低群	平均值	26.31	28.00	1.69
		度数	26	26	26
		標準偏差	4.07	3.92	4.82
	本来感高群	平均值	30.03	31.47	1.44
		度数	36	36	36
		標準偏差	5.06	4.43	4.42
子ども目標群	本来感低群	平均值	27.38	27.47	.09
		度数	64	64	64
		標準偏差	4.21	4.14	4.71
	本来感高群	平均值	30.69	31.54	.85
		度数	57	57	57
		標準偏差	4.84	5.09	4.39

### 3-3-3 保育者効力感に対する保育実習目標と本来感の影響

保育実習目標（保育士目標群／子ども目標群）と本来感（低群／高群）における実習前後の効力感、効力感変化の基礎集計を表3-3に記す。保育実習目標（保育士目標群／子ども目標群）と本来感（低群／高群）が効力感変化に及ぼす影響について分散分析で検討した結果、交互作用は $F = .48$ で有意ではなかった。よって、保育実習目標と本来感の2要因は効力感変化に影響しないことが示された。

## 4 考察

### 4-1 保育実習経験の効果についての検討

本研究では、保育実習を経験する保育専攻生に対し、実習前後に保育者効力感を測定し、保育専攻生全体の平均値を算出したところ、実習前よりも実習後の保育者効力感が全体で.82上昇したことが示され、仮説1は支持された。先行研究においては、三木・桜井が保育短大生、つまり2年制保育専攻生の保育者効力感が幼稚園教育実習の効果で上昇することを報告しており、本研究においては保育実習経験によって4年制保育専攻生においても保育者効力感が上昇したことが示された。両者は保育所実習と幼稚園教育実習の違いはあるが、どちらも就学前の子どもに保育を行う保育実習経験と捉えるならば、保育者養成期間の長短に関わらず、保育専攻生にとって実習する前よりも実習後の保育者効力感が増加することが明らかとなった。保育者効力感の定義は、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」であることから、保育実習経験は、保育専攻生にとって望ましい保育的行為をとることができる効果が感じられる効果があると考えられる。

本研究では、先行研究を踏まえ、保育実習経験の効果を「保育専攻生の保育に関するイメージの変化、及び保育的行為の獲得がなされるもの」と仮定した。先行研究では、保育専攻生の保育全般に関する内的要因の変化についての検討がなされているが、本研究では保育者効力感を使用して検討したことで、保育実習経験の効果は内的要因の変化のみならず、保育的行為の獲得についても効果があることが推察される。

### 4-2 志望動機要因の検討

志望動機における実習前の効力感は、低群 27.10、高群 30.14 であり、両群に有意差がみられた。また、実習後の効力感についても、低群 28.52、高群 30.48 であり、同じく両群に有意差がみられた。よって、実習前後を通して志望動機が低い保育専攻生は効力感が低く、志望動機が高い保育専攻生は効力感が高いことが示されたが、効力感変化については、低群が 1.42 に対し高群は .32 であり、低群は全体平均 .82 を上回る結果が示された。つまり、志望動機高群の方が実習前後の効力感が高いまま推移しているが、効力感変化は低群の方が高い上昇を示したのである。高群よりも低群が高く上昇したのはなぜか。上長は消極的志望動機が高い学生（本研究では志望動機低群）が保育実習を経験することで、子どもに対して肯定的なイメージが高まり、かつ否定的なイメージが低下し、積極的志望動機群（本研究では志望動機高群）と同程度になることを報告している。高群がもともと子どもに対する肯定的なイメージが高いと考えると、保育実習を経験してもさらなる高い上昇はみられないが、低群が子どもに対するイメージが低いとすれば、保育実習経験は子どもに対するイメージの肯定的変化、つまり「子どもを理解すること」による上昇であると考えられる。

しかし、低群の実習後の効力感（28.52）は高群（30.48）と比べて 1.96 低く、かつ、実習後の効力感の全体平均（29.60）にも及ばなかったのはなぜか。低群の上昇要因が「子ども理解」であるとするならば、高群よりも低い原因は、「保育的行為の獲得」が高群よりも十分ではなかったのではないかと考えられる。志望動機が低いということは、高群に比べると消極的な実習行動であることが想定される。子ども理解については消極的な実習行動であっても観察によって学習が可能な部分もあるが、保育的行為は自ら行動して獲得できるものである。よって、志望

動機要因から保育実習経験の効果を検討すると、子ども理解よりも保育的行為の獲得の部分に差がみられるのではないかと推察される。

以上のことから、志望動機が低い保育専攻生に対しては、保育実習経験によって子ども理解が高まることを踏まえながらも、具体的な保育的行為の獲得についての指導の工夫が求められる。

#### 4-3 保育実習目標要因の検討

保育実習目標要因として、本研究では保育士目標群と子ども目標群を設定し、実習前後の効力感及び効力感変化を測定し分析を行ったが、いずれも有意差がみられず、保育実習目標は単独で保育実習経験に影響しないことが示された。しかし、保育実習目標は、志望動機との組み合わせで、効力感変化に対し交互作用がみられた（10%有意傾向）。特に、志望動機が低く、かつ保育士目標にした保育専攻生の効力感変化が高く上昇する傾向が示された。この群の実習前効力感は25.76であり、他の群に比べて最も低い値を示した。つまり、実習前の段階では、志望動機が低く保育士を目標としている保育専攻生は最も低い要因を抱えているが、実習後には28.82になり、3.06と最も高い上昇を示したのである。一方、志望動機が低く子ども目標を持つ保育専攻生の実習後の効力感は28.36であった。これは、保育士目標群の28.82よりも下回る結果であった。よって、志望動機が低い保育専攻生がどちらの目標を持つかによって、保育実習経験の効果に大きな違いがみられることが本研究で明らかとなった。

では、なぜ志望動機低群において、保育実習目標の設定の違いが保育実習経験の効果に影響したのだろうか。その理由として、志望動機が低いということは、保育実習に対し消極的な姿勢であることが考えられる。その際に、子ども目標群は、子どもと関わろうという目標を持ちながらも、消極的な姿勢であることから、どのように子どもと関わってよいかわからず、目標と行動が伴わないことで、保育実習経験の効果が十分得られないのではないかと考えられる。一方、保育士目標群は、消極的な姿勢ではあるものの現場の保育士の保育的行為に着目し、その行動を学習し、やがては自分の保育的行為に取り入れていくと考えられる。つまり、保育士目標群は、保育士を行動モデルとして望ましい保育的行為を学習することで、保育実習経験の効果が高まることが推察される。4-2において、志望動機低群に対し具体的な保育的行為の指導の工夫が求められることを指摘したが、具体的な保育的行為を現場の保育士から学ぶ、つまり保育専攻生に保育士目標を持たせる実習指導が保育実習経験の効果を高めることに繋がるということが推察される。

以上のことから、志望動機が低い保育専攻生に対しては、実習指導において保育士目標を意識させることで、保育実習経験の効果を高めることが期待できると考えられる。よって、本研究において、保育専攻生の志望動機の高さに応じた実習指導の方向性が示唆された。

#### 4-4 本来感要因の検討

本来感要因における実習前の効力感は、低群が27.07、高群が30.43であり、両群に有意差がみられた。実習後の効力感についても、低群が27.62、高群が31.52であり、同じく両群に有意差がみられた。よって、実習前後を通して本来感が低い保育専攻生は効力感が低く、本来感が高い保育専攻生は効力感が高いことが示された。効力感変化については、低群が.55、高群が1.09であり、全体平均が.82であることを踏まえると、低群の効力感変化は全体平均を下回り、高

群の効力感変化は全体平均を上回っている。他の要因では、実習前効力感が低い群の効力感変化が高く上昇するのに対し、本来感要因では高群の方が高く上昇するのはなぜか。

吉田らによれば、本来感の持つ適応的な性質が保育実習特有の不安やストレスを軽減させ、コミュニケーション能力の成長が保育職への適性感や志向感を高めることを指摘している。本来感の高い群が低い群よりも効力感変化が高く上昇した結果と吉田らの指摘を踏まえると、保育実習経験は、不安やストレスを経験し、コミュニケーション能力を獲得していく過程であると考えられる。保育実習指導の観点から考えると、本来感が低い保育専攻生に対して、保育実習特有の不安やストレスへの対処法、並びにコミュニケーションのとり方に関する事前指導の方向性が保育実習経験の効果を高めることに繋がる可能性が示唆された。

#### 4-5 まとめと今後の課題

以上のことから、本研究では次の4点が示された。第1に、保育実習を経験すると、養成期間の長短に関係なく、保育専攻生の保育者効力感が上昇することが明らかとなった。第2に、保育実習経験は、子ども理解と保育的行為の獲得に繋がる効果があることが推察された。第3に、志望動機の高さに応じた保育実習目標の事前指導の方向性が示唆された。第4に、保育実習は実習特有の不安やストレスを経験し、コミュニケーション能力を獲得していく過程であることが本来感要因から推察された。よって、保育実習経験とは、「保育専攻生が保育実習特有の不安やストレスを経験しながら子ども理解を深め、保育的行為やコミュニケーション能力を獲得していく過程」であり、志望動機の高さに応じた保育実習目標の設定が保育実習経験の効果を高める要因であることが本研究で示された。よって、保育実習経験の効果を高めるための保育実習指導の方向性が示された。

本研究においては、保育実習経験に影響を与える事前要因について着目したが、保育実習に影響を与える要因には自己評価などの事後要因も影響することが考えられる。事前要因だけでなく事後要因の視点から保育実習経験の効果を検討することが必要である。

#### 参考文献

- ・須見喜六 (1972) 「保育実習の効果に関する心理学的研究 実習経験が保育者観と自己評価に与える効果」 岡山県立短期大学研究紀要, 16, 31-39
- ・須見喜六 (1973) 「保育実習の効果に関する研究 (第2報): 保育実習経験による保母イメージの変化」 日本保育学会大会研究発表論文抄録, 26, 121-122
- ・中島紀子 (1988) 「保育実習事前学習の一形態: 「三歳児保育実習」 の効果」 日本保育学会大会研究論文集, 41, 672-673
- ・三木知子・桜井茂男 (1998) 「保育専門短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」 教育心理学研究, 46, 203-211
- ・Bandura, A. (1977) *Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change*. Psychological Review, 84, 191-215
- ・Gibson, S. & Dembo, M. H. (1984) *Teacher efficacy: A construct validation*. Journal of Educational Psychology, 76, 569-582
- ・Ashton, P. T. (1985) *Motivation and the teacher's sense of efficacy*. In Ames, C. and Ames, R. (Eds) *Research on Motivation in Education*. Academic Press.
- ・坂野雄二・東條光彦 (1986) 「一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み」 行動療法研究, 12, 73-82
- ・鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 (1982) 「Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討」 教育心理学研究, 30, 38-43

- ・水野里恵（2001）「幼児教育専攻学生の保育効力感－その発達過程と保育実習自己評価との関連－」愛知江南短期大学紀要, 30, 97-110
- ・石川隆行（2003）「保育者を目指す短大生の保育者効力感について」一宮女子短期大学研究報告, 42, 315-322
- ・中村多見（2006）「保育学生の保育観（1）－保育者効力感の発達－」高松大学紀要, 45, 197-206
- ・西山修（2006）「幼児の人とかかわる力を育むための多次元の保育者効力感尺度の作成」保育学研究, 44（2）, 150-159
- ・小蘭江幸子（2009）「保育実習自己効力感尺度作成の試み」淑徳短期大学研究紀要, 48, 123-135
- ・長谷部比呂美（2006）「保育者を目指す学生の志望動機と資質能力の自己評価」淑徳短期大学研究紀要, 45, 115-130
- ・内田雅代・古谷佳由理・兼松百合子・中村美保（1993）「小児看護実習における学生のこどもに対するイメージの変化について」千葉大学看護学部紀要, 15, 35-43
- ・上長然（2010）「保育者養成課程学生における保育実習を通じた「こども」イメージの変容」近畿大学豊岡短期大学論集, 7, 31-39
- ・森知子（2003）「保育者を志す学生の自己効力感と実習評価の関連」臨床教育心理学研究, 29, No1, 31-39
- ・吉田祥子・田島司（2010）「保育専攻生における保育職の適性に関する研究－実習の前後にみる保育職の認知の変容について－」北九州市立大学文学部紀要, 17, 61-74
- ・伊藤正哉・小玉正博（2005）「自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討」教育心理学研究, 53, 74-85
- ・小笠原真弓・谷口恵理香・室みどり（2010）「保育所実習を通じた学生の省察点」信愛紀要, 50, 25-32
- ・森知子（2010）「保育者養成実習における教授－学習過程の特徴－実習生の学習行動を構成する要素について」聖和論集, 38, 55-65

## 謝辞

本研究を行うにあたり、ご指導くださいました東北福祉大学の木村進先生に深く感謝申し上げます。また、本研究に関する調査のご協力を頂いた小松秀茂先生（尚絅学院大学）、西浦和樹先生（宮城学院女子大学）、和田明人先生（東北福祉大学）、並びにご回答いただいた保育専攻生の皆様に心より感謝申し上げます。

## 付記

本研究は、東北福祉大学通信制大学院総合福祉研究学科福祉心理学専攻における修士論文「保育専攻生における保育実習経験の効果について－保育者効力感変化を中心に－」（2013）の一部を修正、加筆したものである。